

井上 紘一

ブロニスワフ・ピウスツキの足跡を尋ねて 40 年
—就中、その極東滞在の究明—

本日は、御多忙のところ御来席を賜り、誠に有難うございます。

顧みますと、私の 29 年にわたる職業生活のなかで、スラブ研究センターに 10 年、間に中部大学に勤務した 11 年を挟んで、文学部附属北方文化研究施設に 8 年、前後併せて 18 年間に北海道大学で過ごしましたので、その大半は北大に御厄介になったこととなります。本日もお集まりくださった皆様は、そのいずれかの時期、あるいは両時期を通じて、何らかの形でお世話になった方々と存じますので、皆様から賜りました御厚情に対し、篤くお礼申し上げます。

本日の話題を選ぶに際しては、いろいろと悩みましたが、結局、私の学生時代に始まるブロニスワフ・ピウスツキとの付き合いについて、拙い話ではありますがお聞きいただくことに落ち着きました。このテーマは、これまでも 40 年にわたってしつこく追求してまいりましたが、恐らくは今後とも体力と気力の続く限り追い求め、少なくとも彼の評伝を執筆するところまでは、なんとか漕ぎ着けたいと願っているからであります。

顧みますと、ブロニスワフ・ピウスツキとの初邂逅は 1964 年頃、東大の駒場で開かれていた「東京スラブ学研究会」の例会であったと記憶します。当時の私は、東京外語大を卒業して教養学部教養学科に学士入学したばかりで、同研究会の末席を汚しておりました。その例会で、早稲田大学の安井亮平さんが二葉亭四迷とピウスツキの付き合いについて報告され、早大図書館蔵の二葉亭宛ピウスツキ書簡の執筆者は、木村毅が想定していたユゼフ・ピウスツキでなくて実兄のブロニスワフであったこと、そしてこの実兄はサハリンで樺太アイヌの研究に従事した民族学者であったが、その生涯は杳として知れない、という事実を知らされます。文化人類学専攻の私は、アイヌ研究に新しい視角が与えられたことを直感的に悟りました。

その後大学院に進学してやはり文化人類学を専攻しますが、東京近辺ではブロニスワフ・ピウスツキの著作を見出すことができませんでした。したがってピウスツキが執筆した論文と初めて対面した場所は、帝政期のロシアで刊行されたシベリア関係文献を読むために留学したフィンランドの、ヘルシンキ大学図書館であります。とはいえ、本格的なピウスツキ研究に着手するには不十分でしたから、帰国して執筆した修士論文はウラル学にかかわる作品であります。

1975 年、北方文化研究施設の文化人類学部門助手として北大に着任して間もなく、私のピウスツキ研究には転機が訪れます。ある日、調べものがあって附属図書館の北方資料室を訪ねると、久しく捜しあぐねていたピウスツキの主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』が書棚に、無造作に配架されているではありませんか。1912 年にクラクフで公刊さ

れた正真正銘の原本です。小樽商大の和田完さんも、父君文治郎さん伝来の原本を1冊所持しておられることがのちに判明しますが、原本の国内所蔵はその当時、この2冊に限られていたと思われます。因みに、今では私も1冊、美装本を所有しております。

北方資料室を精査すると、ピウスツキ論文「アイヌのシャマニズム」の英訳稿も見つかりました。さらに感激したのは、1875年にカザンで出版されたドブロトヴォルスキー著『アイヌ・ロシア語辞典』の発見です。と申すのも、同書の見返しには2段にわたって献辞が記され、上段の献辞はシェロシェフスキが1903年7月2日にバチューラへ、そして下段ではバチューラが1940年5月20日に児玉作左衛門へ、それぞれ同書を献呈した事実を証しています。同頁の上端に押されたワルシャワ在住者ヴァドフスキの蔵書印も考慮に入れるなら、ドブロトヴォルスキー辞典の動静は次のように復元されます。まず、シェロシェフスキはヴァドフスキ旧蔵書をワルシャワで入手して、1903年6月、アイヌ調査のため来道する折に持参し、その後、室蘭から噴火湾岸を巡回するバチューラの伝道行脚に随行できたお礼として、この辞書をバチューラに献呈したこと、一方、バチューラは1940年5月の離札に際し、同書を児玉博士へ贈ったものと推定されます。シェロシェフスキはポーランドの著名な作家でしたが、この時は流刑先のヤクート地方から戻った矢先に再逮捕されそうになって、それを免れるべく、ロシア帝室地理協会が企画した北海道アイヌ調査を引き受けたのでした。なお、この調査にはピウスツキがアイヌの専門家としてサハリンから合流しています。これは彼の2回目の訪日ですが、詳細については付録した「年譜」の囲み記事、ならびに拙稿「B.ピウスツキと北海道：1903年のアイヌ調査を追跡する」を御参照ください。北大ではまた池上二良さんが、ピウスツキの代表作「サハリン島におけるアイヌの熊祭にて」（ロシア語版）を所蔵しておられます。レニングラードの古書店にて求められたと伺っていますが、拝借して閲読する機会に恵まれました。

しかしながら、ピウスツキ著作の収集では、何といたっても1977-78年にソ連で研修した10ヶ月間の収穫を落とすわけには参りません。この初めての長期研修は、日本学術振興会とソ連科学アカデミー間の研究者交換事業のお蔭で実現したわけですが、ブレジネフ政権も最末期のこととて、ソ連社会の随所に綻びを垣間見る機会がありました。加えて、官僚主義や外国人に対する猜疑心にも、至る所で厭というほど遭遇しました。当初予定していたタイミル半島でのフィールドワークは、そこに「科学アカデミーの支部がないから、外国人研究者を送るわけにはゆかぬ」との理由であっさり却下されてしまいます。したがって、許容される唯一の研究活動は図書館における文献研究のみ、人類学者にとっては些かつらい事態となりました。けれどもやはり「人間万事塞翁が馬」であります。このような事態のお蔭で、ピウスツキの著作ならびに彼に関する文献の調査にも、心ゆくまで専念することが可能となったのです。結果的には、この時のソ連滞在中に、ロシアやソ連で刊行されたピウスツキ関連文献は彼の著作も含め、その全体像がほぼ掌握できて、複写を拒否されたものもままありましたが、大部分をコピーすることにも成功します。私事にわたることで甚だ恐縮ですが、この折に女房のニーナとモスクワで出会って結婚できたのも、「塞翁が馬」の

お蔭であったと考えております。

帰国後1年を経た1979年の春頃と記憶しますが、ピウスツキ研究を推進することを目的としてCRAPと称する組織が札幌で誕生した事実は特筆に値します。CRAPとは「ピウスツキ業績復元評価委員会」を意味する英文の頭文字を連ねた略称です。しかし、同時にまた「サイコロ博打」も含意する英語であるため、発起人であった故黒田信一郎さんと私は、この略称を正式名称に採用した次第です。その喫緊の課題は、ポーランドのポズナン大学(正式にはポズナンのアダム・ミツケヴィチ大学)が所蔵するピウスツキ採録の蠟管を日本へ運び、日本の最先進技術を駆使して収録音声を再生することにあります。とはいえCRAPは当初から、ピウスツキの業績を復元・評価するという遠大な事業計画を掲げていましたから、事業の原動力であった黒田さんの八面六臂の活躍もあって、多方面の専門家を結集する学際的かつ国際的研究プロジェクトとして発展してゆき、1981年以降は国際委員会に衣替えしてICRAP(ピウスツキ業績復元評価国際委員会)を名乗るようになります。

収録音声再生事業に関していえば、ピウスツキ蠟管は1983年7月に札幌へ到着、収録音声は北大応用電気研の朝倉利光さんを中心とする工学チームによって首尾よく再生され、その成果はICRAPが1985年9月に北大で開催した、「ピウスツキ蠟管とアイヌ文化」と題する国際シンポジウムで報告されています。因みに、北大総合博物館では、この時の音声再生装置と蠟管のレプリカが常設展示されており、そのコーナーでは再生された音声を試聴することもできます。

ICRAPが推進した事業は多岐にわたりますが、ここでは今なお継続している事業に言及するだけに留めます。まず第1は、7巻を予定している『ピウスツキ著作集』の刊行事業です。これはポズナンのマイエヴィチさんのもとで編集作業が進められていますが、1998年には1-2巻がムトン・デ・グロイター社から同時刊行されました。マイエヴィチさんは2003年2月の自宅火災にもめげず、第3巻の上梓は秒読みの段階、そして第4巻も編集の目処が立ったと伝えてきました。第2は、私が1998年以来進めているPilsudskiana de Sapporoプロジェクトです。このプロジェクトは、ICRAPがやり残した「ピウスツキによる極東原住民研究の評価」を当面の課題に掲げ、ピウスツキ研究の成果を札幌から発信するという趣旨で共同研究を進めており、Pilsudskiana de Sapporoと題する逐次刊行物は2号までが既刊です。加えてスラブ研究センターのウェブサイトでは、同名のホームページも公開中であります。そして第3は、ICRAPの事業というよりむしろその余波ですが、ICRAPが先鞭をつけたピウスツキ研究と、その成果を報告するためのシンポジウムが、世界各地に波及しています。例えばブロンスワフ・ピウスツキを銘打つ国際シンポジウムは、1985年の札幌を皮切りに、1991年にユジノ・サハリンスク、1999年にはクラクフ/ザコパネと、ピウスツキにゆかりの日本、サハリン、ポーランドをリレーして実施されたのみならず、ピウスツキの故郷であるリトワニアでの第4回シンポジウムの開催さえ、すでに取り沙汰されています。

スラブ研究センターの創立40周年を記念して1995年に刊行された『スラブ研究センターの40年』には、1969年以降の研究会記録が収録されています。それによると、1980年

5月26日の北海道スラブ研究会では、「ブロニスワフ・ピウスツキ：サハリン時代を中心として」と題して私が報告を行っています。実は、本日の演題を決めたあとで偶々この記載が目にとまった次第でして、なかなか複雑な心境であります。つまり24年後の退官に際し、同じ研究会においてほぼ同様のタイトルで報告することになったのです。24年前の報告の内容はすっかり忘れてしまいましたので、両者の比較は成立しませんが、何となく因縁めいたものを覚えざるをえません。

前回の報告との関連で、私の脳裏に鮮明に焼きついている情景がひとつだけあります。報告後の雑談でしたが、スラ研にはブロニスワフ・ピウスツキに関する一件資料を収めたマイクロフィルムがある、と秋月孝子さんから御教示を頂いた場面であります。秋月さんによると、この資料は早坂真理さんがポーランド留学中に、クラクフの科学アカデミー図書館の好意で入手されたマイクロフィルムとのこと、私は一も二もなく、この資料を借り出して直ちに目を通し始めたことをよく覚えています。蓋しこれは、慣れぬ手つきでマイクロリーダーを操作しつつ資料を読み、手稿文書の解読を試み、そしてピウスツキ独特の筆跡に接することのできた嚆矢であります。このマイクロフィルムが全面的にプリント起こされたあとは余ほど読みやすくなりましたので、ICRAP 同人の間にコピーで配布することで、大いに活用されるようになります。スラ研には感謝の意味もこめて、プリント版1式を寄贈いたしました。したがってスラ研図書室では、ピウスツキ関係クラクフ手稿がマイクロフィルムのみならず、プリント版でも閲覧が可能です。

では、本題に入ります。

ブロニスワフ・ピウスツキは1866年11月2日、ロシア帝国に併合されていたリトワニアの、首都ヴィルニユス北東60キロに所在するズーウフ(現ザラヴァス)で呱呱の声を上げます。1887年3月にはペテルブルグで、ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座して逮捕され、裁判を経て、同年8月25日には既にサハリン(樺太)に到着しています。当初は強制労働に服すべき国事犯でしたが、97年2月、本来の刑期15年が恩赦で3分の2に減刑となって刑期満了。99年3月には大陸のウラヂヴォストクへ脱出できました。しかし1902年から3年間は、かつての流刑地に再び舞い戻り、ロシア科学アカデミーの委嘱でサハリン原住民の調査に従事します。

1906年には日本、アメリカ合衆国、西ヨーロッパを經由して、同年9月、三国分割のもとでオーストリア統治下にあったポーランド(ガリツィヤ)に帰着します。だが、その後の人生も概して不遇で、故郷のリトワニアに帰ることも叶わず、ヨーロッパ各地を転々と流浪のすえ、1918年5月17日、パリにて自死を遂げることとなります。享年51歳でした。

以上の略歴から明らかなように、ピウスツキはその52年の生涯のうち、青壮年期の19年間を東アジア、より正確にはその一隅を占めるロシア領極東に居住することを強いられます。つまり満年齢で20歳から39歳まで、人生の最盛期を極東で過ごすことになったわけです。ピウスツキ自身にとって、それがきわめて重要な意味を持った19年であることに

は議論の余地がありません。一方、極東に在住する研究者にとっても、ピウスツキの極東時代の究明は、われわれが国際的ピウスツキ研究に対して負うべき責務であります。したがって、私のピウスツキ研究でも半ば必然的に、「極東滞在の究明」が主要課題となるわけでありませぬ。

さて、一概に 19 年といっても、北サハリン時代、ウラヂヴォストク時代、再度のサハリン滞在、そして日本滞在への細区分が可能で、それぞれの時期は別途に取り組むべき独自テーマですので、ここでその全経過を詳論することはできません。そこで本日は話題を絞らせていただき、ピウスツキが 1902 年から 1905 年にかけてサハリン調査に従事する間に、アイヌならびにアイヌ文化とどのように関わったかを、下記の 2 事例に即して解明を試みることに限定いたします。なお、このテーマでは英文の論文を既に公刊しており、これからのお話ではかなりの部分はその再話になりますが、若干の新情報も含まれますので、御寛恕くださるようお願いいたします。

第 1 の事例はピウスツキによる「アイヌ識字学校」の実践であります。そこでは彼がどのようにアイヌの人たちと接点を持ったかを追求します。事例の第 2 は「樺太アイヌ統治規定草案」の起草ですが、ここではピウスツキのアイヌ研究の特徴とその成果を検討する予定でせぬ。

ところで、彼が実践したアイヌ教育には、その前史がありました。

1887 年晩夏、サハリン島に初めて上陸したピウスツキは、遅くとも 93 年にはニヴフ(ギリヤーク)の子供たちを相手にかなり本格的な教育を手懸けるとともに、ニヴフ文化の研究にも着手しています。そのなかでインディアンという非常に聡明なニヴフの少年と出会うこととなります。ロシア語も算術も、乾いた砂が水を吸いとるように学ぶインディアンを、ピウスツキは 1899 年早春にウラヂヴォストクへ移るときに連れて行きます。インディアンは実科学校に入学します。ゆくゆくはニヴフのもとへ戻して、最初の自前の教師にする心積もりだったのですが、少年はウラヂヴォストクの風土に馴染めず、1901 年には肺結核を発病してしまいます。

1902 年 7 月、ピウスツキがウラヂヴォストクからサハリン調査に赴く際、インディアンも帯同しています。ピウスツキにはインディアンの結核養生という意図も無論あったわけですが、彼に教師の経験を積ませることも念頭にあつて、実際にアイヌの「識字学校」で教鞭を執らせています。しかし、インディアンは僅か 3 ヶ月ほど教師を経験しただけで、肺結核をこじらせて亡くなります。これはインディアンにもピウスツキにも、またニヴフ全体にとつても、大変残念なことでありました。

このようにピウスツキはサハリン調査に出かける前から、原住民教育についてある種の計画を抱いていたことが窺えます。とはいえ、ピウスツキの調査報告によると、樺太アイヌの識字教育を発想した端緒は、マウカ(真岡)のアイヌによって与えられたと記しています。1902 年の 7 月、まず最初に西海岸のマウカを訪ねたところ、当地のアイヌが日本語に堪能

である事実に驚愕し、ロシア語を教えてもきつとうまくいく筈だと確信したそうです。そこで彼らに、サハリンの軍務知事に対して学校を開くよう陳情させて、その陳情書はピウスツキ自身が執筆しています。これが功を奏して「識字学校」がマウカに開設となりますが、教鞭を執ったのはピウスツキの友人であるキリロフ医師でした。因みに、同医師はモスクワ大学医学部でチェーホフと机を並べて学んだ級友です。

ピウスツキは1902-5年の足掛け3年間、東海岸のアイヌのもとで「識字学校」を開設し、子供たちにロシア語と算術・算盤を教えました。これは子供らが家事から解放される冬場に行ったもので、1902-3年にはシヤンチャ(落合)、オタサン(小田寒)の2コタン、1903-4年はナイブチ(内淵)にそれぞれ設置することになります。1904-5年には日露戦争中にも拘らず、6コタンを巡回する訪問授業を組織します。こうしたピウスツキの努力は一定の成果を上げて、彼もまたアイヌ教育の有効性を確信しえたのですが、日露戦争におけるロシアの敗北で、すべては水泡に帰してしまいます。

1902-3年の冬に開設の「識字学校」では、シヤンチャでインディンが、またオタサンでは千徳太郎治がそれぞれに教師を務めます。インディンは既述のように病に鞭打って授業を続けますが、その途中で「殉職」したわけです。彼の最大の功績は、自らが手解きしたトゥイチノが1904年には自分のコタン(シヤンチャ)で識字教育の実践を始めたことでしょう。一方、千徳太郎治(ピウスツキやシェロシェフスキはタロンチと記しています)は1929年に『樺太アイヌ叢話』を著しているの、御存知の方もいるかと思いますが、日本人を父に、そして樺太アイヌを母としてナイブチに生まれた「対雁アイヌ」です。「対雁アイヌ」とは、1875年の千島樺太交換条約の直後にアニワ湾の沿岸一帯から北海道へ移住した樺太アイヌで、北海道では石狩川河口の対雁に落ち着くことになったため、そう呼ばれています。対雁では北海道アイヌに先立って初等教育が実践されたので、千徳太郎治は5年間通学して、日本語の読み書きを身につけた上でサハリンに戻りました。その直後にピウスツキと出会った千徳は、ロシア語がほとんどできませんでしたが、ピウスツキからロシア語の特訓を受けた結果、1903年の夏には、シェロシェフスキとピウスツキの北海道アイヌ調査に、通訳として同行できるまでになっています。

1903-4年の冬、2年目の「識字学校」が東海岸のほぼ中央にあるナイブチに開設されます。インディンはすでに亡くなっていましたから、ピウスツキはやむなく千徳太郎治を助手として、自らが教鞭を執ることになりました。今回は、子供たちが寄宿舎に寝泊りをする形で授業を試みたこともあって、ロシア語の読み書きで長足の進歩が見られました。ところで、この年の「識字学校」で予期せぬ副産物が得られたことは、特筆に値します。生徒らがロシア語を学ぶうちに、キリル文字(ロシア語の字母)を使ってアイヌ語の文章を記すことが自然発生的に起きた、とピウスツキは述べています。これは生徒らの学習意欲を頗る高めることになったようで、冬場だけなのでさほど長い期間ではありませんが、毎日いろいろなテーマで作文を書いてはピウスツキのもとへ持っていったというのです。

その後日談として1905-6年には、日本に滞在中のピウスツキのもとへ、千徳太郎治か

らキリル文字で記したアイヌ語の手紙が少なくとも3通送られています。ピウスツキがどのような返事を書いたかは不明ですが、返書を受け取ったという記載が千徳の手紙には認められます。いわゆる文章語というのは本来、学者の作成する表記法に基づいて成立するものですが、ここでは話者自身のイニシアティブで「文章語」が自然発生的に出来上がっていった事実、そして千徳とピウスツキの間で手紙を交わすところまで、それが実際に使用された事実は、注目に値すると思います。但し、残念ながらこの「文章語」は、私の知る限り樺太アイヌのもとでその後に継承されることはありませんでした。キリル文字による「文章語」だったからだと思われまます。

2年目の「識字学校」が開かれていた冬、1904年2月には日露戦争が始まります。戦争の勃発に動揺した親たちが、「子供は家族と一緒にいるべきだ」「どうせ死ぬなら一緒に死にたい」と言って、次々に生徒を寄宿舎から引き取っていったため、この年の学校は若干早めに終了することを余儀なくされました。

3年目に当たる1904年から1905年にかけての冬、戦争はまさに酣であったにも拘らず、ピウスツキは教育の実践を断念しませんでした。けれどもナイブチでは、前年に校舎兼寄宿舎として使用した建物は軍隊に占拠されていて学校を開くにも場所がなく、アイヌの親たちも戦争中にあえて子供にロシア語を学ばせることは望まずで、学校の開設は遂に叶いませんでした。そこで案出されたのが訪問授業です。今回も教師を引き受けた千徳太郎治は、ロレー(魯礼)、ナイブチ、アイ(相浜)、オタサン、セラロコ(白浦)を巡回して、生徒らが前年に習得した知識の復習に努めました。トゥイチノも地元のシヤンチャで訪問授業を行っています。

1905年になると、それまでは戦場となることを免れていたサハリンへも日本軍の上陸は必至という情勢で、住民の間にはいろいろな風説や流言が飛び交いました。樺太アイヌの人たちをとりわけ困惑させたのは、日本軍が上陸してきたら樺太アイヌは率先して協力するだろうという噂だったようです。そのような情勢のもとでロシア語を教えるというのは、頗る微妙かつ複雑な問題だったと思います。ピウスツキはこの状況を、アイヌの友人から「俺は息子をお前の所には遣らない。明日の命も分からぬのに、ロシア語を知っていようといまいと大差ないではないか」と、また別の友人には「ナイブチの子供らだけにロシア語を教えるということは非常にやばい。各コタンから一人ずつ男の子を集めて教えるべきだ」と言われたと記しています。一方では、ロシア語を覚えると、ロシア側で組織した「義勇兵」軍団に徴用されるという風説が流布していました。他方で当時は日本軍が優勢でしたので、ロシア語を学ぶと日本に占領された時に困るのではないか、という懸念もあったのです。

なお、1905年に南サハリンが日本領南樺太となったのち、内淵にアイヌ教育所が開かれ、そこで千徳太郎治が教師を務めるようになるのは1912年のことでした。先にピウスツキのアイヌ教育の実践は、日露戦争によって水泡に帰したと申しましたが、より正確を期すとするれば、彼の遺志は千徳によって受け継がれたと言うべきでしょう。但し、千徳の著書『樺

太アイヌ叢話』を繙いても、ピウスツキのことやその教育実践に対する言及は見当たりませんが、その間の事情はいまだ不分明です。千徳太郎治の同時代人に、山邊安之助という対雁アイヌがいました。彼は犬橈の専門家として 1910-12 年の白瀬南極探検隊に参加したことや、1913 年刊行の『あいぬ物語』(1980 年再刊)の著者としても著名であります。トンナイチャ(富内)に暮らす山邊は、1903 年以來ピウスツキと交流があり、インフォーマントとしてフォークロアを口述しています。1909 年、彼は寄付を募ってアイヌ子弟のための学校をトンナイチャに建設しますが、これもやはりピウスツキの教育実践を継承するものと言えるでしょう。

次なるテーマは、1905 年の 3-4 月にピウスツキが起草した「樺太アイヌ統治規定草案」です。これは歴史的にも極めて重要な労作ですが、その内容がつい最近までは未詳でした。しかし今では、当時サハリン州郷土博物館館長であったラティシェフさんの尽力で、「草案」には「トムスク稿」「ウラヂヴォストク稿」という 2 稿の存在する事実が判明、両稿ともラティシェフさんによって公刊されています。

1902 年 7 月、マウカでの調査を終えたピウスツキは、8 月初め函館へ来航して初来日を果たします。函館ではデンビー父子、森高夫妻と交遊した事実が判明していますが、アイヌとの出会いはなかったようです。9 月 10 日、函館からコルサコフに戻ったピウスツキは 13 日まで、リャプノフ軍務知事に会見するためコルサコフに滞在します。彼はその際、調査への支援もさることながら、「アイヌ識字学校」への理解と協力を要請することも目論んでいました。会見の席でリャプノフ知事は、ピウスツキの要請をすべて快諾したあと、久しく知事の頭を痛めていたサハリン原住民統治規定の起草と、原住民の人口調査の実施を懇願するのです。知事はピウスツキ宛私信のなかで「あなた様を措いて、他に頼める方はありません」と記しています。

そもそもピウスツキのサハリン調査は、ロシア科学アカデミー博物館のために樺太アイヌとウイльтаの民族資料を収集することが使命でしたが、統治規定起草と人口調査が加わったこととなります。1902-5 年のサハリン滞在中、日露戦争とその前後の混乱にも拘らず、ピウスツキはいずれの課題も見事に遂行します。前者は、サンクト・ペテルブルグの人類学民族学博物館に世界最大かつ最良の樺太アイヌ・コレクションをもたらしました。また後者についても、1905 年 4 月 12 日擱筆の「樺太アイヌ統治規定草案(ウラヂヴォストク稿)」[沿海地方国家歴史文書館蔵]がリャプノフ知事へ提出されています。いま一つの「トムスク稿」[トムスク大学図書館蔵]は、1905 年 3 月の日付ですので初稿とも考えられますが、ピウスツキはそれを 1912 年頃まで手許に置いて推敲を加えていたと想定されるため、むしろ最終稿と見なすべきでしょう。両稿はいずれも 28 ヶ条から成り、条項も逐一符合しています。違いはといえば、「トムスク稿」は「ウラヂヴォストク稿」の 2 倍に達するという、ページ数の差に端的に表れています。つまり後者では、前者に満載されたアイヌ文化にかかわる詳細な解説が極力削ぎ落とされて、法文としての体裁が整えられており、その意味では、後者が前者の改訂版であることは一目瞭然です。

ここで統治規定草案の起草が求められた背景について、簡単に触れておきます。ロシア帝国では、1822年にスペランスキーが制定した「異族人統治法」が、20世紀初頭までほぼそのまま存続していました。とはいえ、古色蒼然たる同法はもはや実情に合わなくなっていたため、19世紀末には皇帝が再度にわたって改定を命ずる勅令を発しています。これを受けた内務省は、ハバロフスクのプリアムール総督府を通じてサハリン知事に対しても、サハリン州の改訂案を提出するよう命じていたわけです。

ところが「牢獄の島」サハリンではこの業務をこなせる人材が見出せず、リャプノフ知事はペテルブルグとハバロフスクから発せられる矢のような催促に、頭を抱えこんでいました。まさにその時、ピウスツキがサハリンに姿を現わします。そこで知事は「藁をも掴む」思いで彼に泣きついたわけです。この「藁」は幸運なことに、世界広しといえども、知事はその希望を託しえた唯一の人材にははかなりません。独学とはいえピウスツキは、サハリン原住民の研究に従事していた唯一の専門家であるばかりか、たとえ1886年の秋学期のみとはいえ、ペテルブルグ大学法学部に在籍して法律を学んだ経歴の持ち主でもあったのです。ラティシェフさんは、ピウスツキが在籍した1886年度秋学期の法学部便覧で当時の開講科目を参照しつつ、彼が立法実務に関してずぶの素人ではなかったろうと推測しています。

では、ピウスツキ起草の「草案」の検討に移ります。その全体を貫く精神は、樺太アイヌの自治と自立を法的に担保することを通じて、伝統文化を維持しながら彼らの公民化を漸進的に図ることに求められます。

まず、自治の単位として、ロシア帝国で最小の地方行政区域である「郷(ヴォロスチ)」[日本の「行政村」や「大字」に相当]が、コルサコフ管区(南サハリン)の東西各分区に2郷ずつ、計4郷が設定されます。つまり「郷」の範囲内においてアイヌが自立して生業活動を行い、伝統文化が維持できる方策を考えるというのです。なお、樺太アイヌが小規模なコタンに分かれて散居している実情に鑑み、漁撈、狩猟などの伝統的生業活動に適した場所に集住して、大規模な行政村を設営する方向を提言しています。

次に、自治を担う行政組織は、当然ながら、軍務知事を頂点とするピラミッド構造の末端に位置づけられます。指揮系統は知事→異族人長官→郷長・助役・書記→行政村長と流れる上意下達ですが、最末端での行政村とその上位の郷において、レヴェルの異なる自治が保証されます。例えば、郷レヴェルの重要案件は、2異族人長官、4郷長、8助役の都合14名で構成される「異族人評議会」において審議・決定されることとなります。ピウスツキ「草案」の独創的な部分は、帝国の農村地域に導入された農民長官に準える形での、「異族人長官」の設定です。同長官は知事直属の行政官ですが、原住民に対する監督責任を有するため、彼らの言語を解する者を任命すべきとしています。なお、投票によって3年任期で選出される郷長や助役、行政村長は無給とするも、書記だけは有給職員として、原住民からの採用が望ましいとコメントされています。

ここでは逐条的に検討する余裕がありませんので、興味深いトピックについて掻い摘んで紹介します。まずは納税と兵役ですが、サハリンの原住民はそれまで、いずれも免除され

ていました。シベリアの異族人全般に課されていたヤサーク(元来は毛皮で物納された人頭税)すら課されなかったのです。しかしながらピウスツキは、公民としての義務は応分に果たすべきとして、漁獲物販売益に対する直接税の賦課を提案しています。また兵役についても、諸般の事情から当面は免除が望ましいが、いずれは徴兵にも応ずべきであろうと述べて、北海道アイヌがすでに和人に伍して兵役に就いている事実にも(「トムスク稿」のみで)言及しています。28ヶ条中の2ヶ条は医療に関する規定ですが、各郷に一つ必ず診療所を設置し、アイヌに対して人道的に接する医師を常駐させることを提言しています。

教育問題では、既述の「識字学校」の実践を踏まえて、どのような学校を設置すべきかを巡って蘊蓄を傾けています。例えば、ロシア人入植者とアイヌが共住するナイブチには、ロシア人とアイヌの子弟が共学する学校の設置を提案しています。但し、ロシア語教育だけはアイヌ子弟のために別立ての授業を実施すべきとしています。したがって、もしこのような学校が実現していたら、ナイブチの住民はロシア語とアイヌ語のバイリンガルになることが期待できたでしょう。

この当時は漁業権と狩猟権の確定、つまりアイヌが独占的に利用できる漁場や猟場の確保が、現在と同様に喫緊の課題でした。南サハリンの東西両海岸では、日本人の漁業者がかなり以前から漁場を持つようになり、1875年にサハリンがロシア領になってのちもそれは堅持されます。アイヌの人たちは日本人漁業者に雇用されて漁業に従事するようになったのです。しかも1902年頃には、刑期を終えてもサハリンに残留することを強いられた元服役囚の数が増えてきて、漁撈や狩猟にも従事するようになります。こうしてアイヌの伝統的な漁場や猟場は、日本人やロシア人によって、大幅に蚕食されていったわけです。したがって、アイヌがこうした事態に対処するためにも、ピウスツキは先述のように「漁撈、狩猟といった伝統的生業活動に適した場所に集住して、大規模な行政村を設営」すべきことを提言したのです。つまり、このような行政村の域内に漁区や猟区を確保するとともに、入植者はアイヌの村の存在しない所に漁場を設定すべきことを謳っています。

ピウスツキの「草案」は、要するに、その後にも世界の各地でさまざまに検討されてきた問題、すなわち原住民が近代国家に統合される際の戦略、換言するなら、原住民はどういう形で統合されるのが望ましいかとの問い、に対する一つの解答と言えるでしょう。1905年という執筆時期を勘案するなら、ピウスツキ「草案」は、自治・自立を前提としつつ、民主主義と人道主義に立脚する統治のあり方を、最も早い段階で提示したものと評価することができます。

「草案」(ウラヂヴォストク稿)がリャプノフ知事へ提出されたのは、1905年の4月12日以降ということになります。だが、ピウスツキが離島して1ヵ月後の7月19日には、リャプノフ知事を司令官とする在サハリン・ロシア軍が日本軍に降伏していますので、もし知事が「草案」に目を通していたと仮定するならば、それ以降ではありえません。「ウラヂヴォストク稿」は、第二次大戦中に極東地方の公文書の疎開先となったトムスクの公文書館において、ラティシェフさんが1980年代に発見しました。けれども今ではトムスクからウ

ラヂヴォストクに戻っているため、「ウラヂヴォストク稿」と命名した次第です。ピウスツキは1902年9月に「草案」起草と人口調査の依頼を受けて以降、足掛け2年半を費やして両課題を遂行したわけです。「草案」には、アイヌの人口調査結果をまとめた報告書も添付されていましたが、ロシア軍の対日降伏によって、両文書が有効に活用され、法制化される機会は永遠に喪われてしまいます。

ピウスツキは1906年にヨーロッパへ戻る途上、日本に7ヶ月ほど滞在します。その間、二葉亭四迷、横山源之助(天涯)、上田将、大隈重信、宮崎民蔵・滔天兄弟、坪井正五郎、鳥居龍蔵など、多彩な日本人たちと交遊していましたが、そのなかで、アイヌ研究に関する最初の作品を日本において、日本語で公刊する[訳者は上田将]こととなります。1906年に「ブロニラウ・ピルスドスキー」という署名で、京華日報社の『世界』という雑誌の26-27号に連載された論文「樺太アイヌの状態」がそれですが、リャプノフ知事へ提出した人口調査報告書の抄訳にほかなりません。二葉亭四迷をしてその人となりをして「アイヌ救済を一生の大責任と心得て、東京まで出て来た。所が世間が餘りに冷淡なので大に憤慨して居たやうだ。・・・囊中屢ば空しと言ふ有様で、衣服などは粗末で、食物などは何をも選ばぬ、生命さへ継げば、夫れで充分だ、ドウしてもアイヌの如き憐れむべき人種を保護しなければならぬと考へて居る」(横山源之助著「真人長谷川辰之助」所引)と形容せしめたピウスツキは、日本人のアイヌ研究者と会ったり、交信の遣り取りをして、今や日本統治下に入った樺太アイヌの「救済」を訴えたのみならず、日本の識者に対しても同趣旨の呼びかけを試みたわけです。因みに、人口調査報告書のロシア語原文の方は、1年後の1907年にウラヂヴォストクで公刊されました。

ピウスツキによるアイヌ研究の特徴とその成果を考察するなかで、総括を試みます。

まず第1の特徴として、ピウスツキのアイヌ研究は全くの偶然から始まったことが指摘されます。そもそも皇帝暗殺事件に巻き込まれなければ、彼は恐らく極東地方に来ることもなかったでしょう。したがって、アイヌと出会うこともなかったわけです。しかし、様々な偶然が重なる形で1896年、ピウスツキは南サハリンへ赴き、樺太アイヌの人たちとの付き合いが始まります。必ずしも明言されているわけではありませんが、ピウスツキは最初に手懸けたニヴフの言語や文化よりも、アイヌのそれの方をより親しいものと捉えていたように思われます。そういう個人の好みが生じたにせよ、とどのつまりは偶然の産物でした。しかも流刑囚としてサハリンに到着したわけですから、いろんな可能性がありえたとは申せませんが、民族学者になるという必然性は基本的にはなかったのです。しかし、たまさかの環境と出会いの中で、彼は独学で民族学を専攻する道を選びます。当初はニヴフのもとでこの学問を始めますが、やがて、(とりわけ1902年以降は)樺太アイヌの研究に傾倒して行きます。

第2の特徴は、本人の持って生まれた心優しい性格です。これについてはいろいろな人がいろんな所で、特に年子の実弟で「ポーランド国家再建の父」と称されたユゼフ・ピウス

ツキとの対比において、ブロニスワフは非常に心優しい人物であったと証言しています。この心優しさは必然的に、当時の若者の心を捉えた社会主義、人道主義の思潮にピウスツキを接近させます。しかし、これらは不運にも、帝国内に澎湃と出来していた反体制運動の思潮でしたから、彼の人生はそうした流れの中で形作られるのでした。これは時代の特色と言えるかも知れません。

このような性格は、至る所で付き合うようになった原住民から、民族学者にとっては不可欠である「全幅の信頼」が寄せられたという成果をもたらします。そればかりか、自分たちの支配者や王様になってくれという言い方で尊敬を集めるようなこともありました。1906年にピウスツキとかなり親しく付き合った二葉亭が、その人となりについて語った箇所は先に引用しましたが、彼には子供のように無邪気なところがあって、懐に一銭もないのに、アイヌを救うために何かしなくちゃならない、アイヌを救うことが自分の使命だともまで言い募る変な奴だ、と満腔の愛情を込めて表現しています。

第3の特徴ですが、その当時としては最新の科学技術の活用が挙げられます。ピウスツキはカメラとエディソン式蠟管蓄音器を携えてフィールドワークを実施しますが、その成果は画期的なものでした。まず、彼がサハリンで撮影した写真は、当時の出版物にかなり頻繁に掲載されていた事実が、最近の調査で判明しています。このような写真は、カメラを持っていなければありえなかったわけです。あるいは、偶々カメラが使える時代に際会し、その近代技術活用の才に長けていた、と言ってよいのかも知れません。カメラに劣らず大きな成果を上げたのは蠟管蓄音機です。ピウスツキ採録の蠟管は恐らく200-300本あったと思われていますが、1983年に北大がポーランドのポズナン大学から、その所蔵蠟管を借用した際には、僅か64本しかありませんでした。とはいえピウスツキ採録蠟管は、依然として(例えばサンクト・ペテルブルグで)発見されることが期待できます。ところで64本の録音蠟管は、国際的な研究組織ICRAPを発足させ、日本の最新技術を駆使して音声再生されたことで、ピウスツキ研究を学際的に推進する原動力となります。それだけでなく、これらの蠟管に収録された樺太アイヌならびに北海道アイヌの音声は、録音されたアイヌ語の肉声としては最古のものと言って宜しいかと思えます。

第4の特徴的なスタンスとして、原住民の民族としての自助自立自治の重視を落とすわけには参りません。それは「樺太アイヌ統治規定草案」の中にも脈々と流れています。

第5の特徴は、教育をとりわけて重視したということです。近代国家の一員となるには、どうしても基本的教育は避けて通れないわけです。そのために、どのような教育制度を設けるべきかを巡って思索を重ねる際に、机上の空論ではなくて、「識字学校」の経験を踏まえつつ施策を練り上げている点が高く評価されます。

言語研究が第6の特徴です。この点については詳しく申し上げる余裕がありませんが、当時の民族学研究は、まず言語の研究から着手せざるをえない状況でした。したがって、ピウスツキはアイヌ研究でもニヴフ研究でも、同じように言語の習得から手懸けています。代表的な関連著作としては、ポーランドで1912年に刊行された、前述の英文著作『アイ

ヌの言語・フォークロア研究資料』をやはり挙げねばなりません。同書はアイヌ語を正確無比に記録した傑作として、今なお多くのアイヌ研究者が座右の銘にしています。またウイльта語、ウリチ語、ナーナイ語に関しても優れた研究成果が残されていて、編集作業が進行中の『ピウスツキ著作集』に順次収録されることになっています。

第7の特徴として、卓越した民族誌の叙述が挙げられます。既述のように、最新技術の粋をその非常に早い段階で導入し、しかも研究の対象となる人たちの信頼も確保しながら研究を進めた事実もさることながら、ピウスツキに独特の観察力、洞察力、言説も特筆に価します。例えば、1909-14年に露独・ポーランド語で発表された樺太アイヌの熊祭りに関する一連の論文は、アイヌの熊送りの叙述としてはきわめて異色な作品です。というのも、儀式の現場のあらゆる場面に立ち会えるという自らの立場を生かして、あたかも記録映画をとるが如く、様々な視座から観察した結果を、彼は臨場感に溢れる筆致で叙述しているからです。

第8の特徴は、ピウスツキが樺太アイヌの女性と結婚し、一男一女をもうけたという事実です。しかし、ピウスツキがサハリンと訣別した1905年には妻子を連れて行くことが叶わず、家族はサハリンに残留となりました。愛妻はその後にサハリンで亡くなりますが、長男長女は戦後北海道に移住して、現在は孫と曾孫の方々の世代が日本に在住しておられます。したがって、ブロニスワフ・ピウスツキに関する限り、その子孫はすべて日本に住んでいます。ブロニスワフの兄弟姉妹はヨーロッパの各地に分散していますが、ユゼフには娘が二人居ただけですので、直系曾孫の木村和保さん(長男助造さんの長男)は、ピウスツキ家唯一の男系子孫として横浜で暮らしておられます。

最後に、特徴の第9として挙げざるをえないのは、1904-5年の日露戦争が、ピウスツキの活動を徹頭徹尾妨害したという事実です。日露戦争が起きたためいろんなことができなくなり、あるいは戦争によってその方向が変えられてしまいました。いずれにせよ、日露戦争なかりせば、もっと違った展開がありえたと思定されます。例えば「統治規定草案」は、もしこれが実際に成案となって施行されていたならば、そしてまた後続したロシア革命が、もしもすぐには起こらなかったとすれば、樺太アイヌには全く違った歴史があった筈です。その意味で、日露戦争による頓挫は頗る残念であります。

ブロニスワフ・ピウスツキ(Bronisław Piłsudski)年譜

1866年11月2日(露暦10月21日)、リトワニアのZułów/Zalavasにて出生。

1887年3月14日(露暦3月2日)、露都サンクト・ペテルブルグにて、露帝アレクサンドル3世暗殺未遂事件に連座して逮捕される。

1887年6月20日(露暦6月8日)、525人の既決囚を収容するロシア義勇艦隊輸送船「ニジニー・ノヴゴロド号」オデッサ出航。

* * *

1887年8月25日(露暦8月13日)[?],「ニジニー・ノヴゴロド号」、スエズ運河、インド洋、日本海を経て、サハリン島北西海岸のアレクサンドロフスク港[日本名・亜港]に到着。翌日には、ティモフスク管区に流刑囚や元流刑囚らが拓いたルィコヴォ[現キーロフスコエ]村へ送られた。

1893年頃、ニヴフ語・ニヴフ文化の本格研究に着手。

1896年5月14日(露暦)、露帝ニコライ2世の戴冠に伴う恩赦令で減刑(15年→10年)。

この年、コルサコフスク管区に測候所設置のため、コルサコフ[大泊]、ガルキノ・ヴラスコエ村[落合、現ドリンスク]へ派遣される。

権太アイヌ語・アイヌ文化の研究に着手。

1897年2月16日(露暦)、刑期満了。

1899年3月9日(露暦)、インディン少年を伴ってウラヂヴォストク[浦塩]到着。ロシア帝室地理協会アムール地方研究会博物館の管理人就任(→1902年5月28日退任)。

1902年7月8日(露暦)、ロシア帝室科学アカデミーの委嘱でアイヌ、ウイльта調査のため、エディソン蓄音機と蠟管を携えてコルサコフ着。直ちに西海岸の真岡[現ホルムスク]周辺で調査開始。

1902年8月6日～30日(露暦)、函館訪問(初来日)。デンビー父子、森高夫妻と交遊。

1902年9月10日～13日(露暦)の1日、コルサコフにてリャプノフ・サハリン州軍務知事と会見、サハリン原住民統治規定の起草と人口調査の実施を懇願される。

この年の冬、南サハリンの2コタンでアイヌ子弟のための識字学校を開設。一つはインディンが死の直前まで教鞭をとったシヤンチャ[ロシア名シヤンツィ、のちにガルキノ・ヴラスコエ、日本名落合、現ドリンスク](露暦11月10日～1903年2月28日)。一方、東海岸のオタサン[小田寒、現フィルソヴォ]では、対雁アイヌの千徳太郎治が教えた(露暦12月31日～1903年3月末)。

1903年2月14日、サハリン東海岸のアイ・コタンにて、アイヌ人の妻チュフサンマとの間に長男[木村]助造誕生(→1971年6月5日、富良野市山部にて逝去、享年68歳)。

1903年6月20日～9月24日(露暦)、ロシア帝室地理協会がシェロシェフスキのために組織した北海道アイヌ調査に、サハリンから随行した通訳・千徳太郎治とともに参加(第2回の来日)。「ロシア」調査団は函館、白老、平取、札幌を巡歴した(但し、日付が判明しているのは8月5日の室蘭入港、8月12日白老滞在、9月15日の札幌到着のみ)。日露関係険悪化のため中断を余儀なくされた。情報源は、Wacław Sieroszewski, “Wśród kosmatych ludzi” (毛深い人たちの間で); 『ジョン・バチラー自叙傳：我が記憶をたどりて』(いずれも1927年刊)など。

1903年12月2日～1904年3月末日(露暦)、東海岸内淵[現ウスチ・ドリシカ]に寄宿制学校を開設、千徳太郎治を助手として自らも教鞭をとる。

1904年2月8日、日露戦争勃発。

1904年3月31日～11月中旬(露暦)、日露開戦にもかかわらず、懸案だったタライカ地方

とティミ河谷の踏査を敢行、タライカ・アイヌのほかにもウイльта、ニヴフの調査も行って、素晴らしい成果をあげる。

帰路に立ち寄った名寄[ナイエロ、現ガステロ]では、4人のアイヌ少年にロシア語と算術を教えた(10月中の数週間)。

1904年の夏、インディンの生徒だった18歳のトゥイチノは地元のシヤンチャで、子供らにロシア語と算術の手ほどきをした。

1904年12月中旬～1905年2月中旬(露暦)、戦時下で学校が開けないため訪問授業に切り替え、27歳の太郎治は魯礼、内淵、アイ[相浜]、小田寒、白浦[シララカ、現ヴズモリエ]を歴訪、トゥイチノは地元シヤンチャを受け持った。

1905年3月7日(露暦)、家族を残してサハリンを去る決意を固め、犬橇でアイを出発、一路北上した。名寄、チフメネフスク[敷香、現ポロナイスク]を経て、ロシア人が開拓した北サハリン内陸部の農村に至り、2ヶ月間[露暦3月28日～5月30日]、オノール、リュコヴォ、デルビノ[現ティモフスコエ]に滞在して報告書を執筆。

1905年3月(露暦)、「樺太アイヌ統治規定草案(トムスク手稿)」撰筆。トムスク大学図書館蔵(チフメネフスクにて執筆か)。

1905年4月12日(露暦)、「樺太アイヌ統治規定草案(ウラヂヴォストク手稿)」撰筆。リャプノフ知事に提出された改訂稿。ウラヂヴォストクの沿海地方国家歴史文書館蔵(リュコヴォにて執筆か)。

1905年6月11日(露暦)、アレクサンドロフスク港を小蒸気船「ウラヂヴォストク号」で出発、翌12日アムール河口のニコライェフスクに到着。

1905年7月19日(露暦7月7日)、サハリン駐留ロシア軍降伏。リャプノフ知事ら、日本軍の捕虜となって東京へ。

1905年9月5日、日露講和ポーツマス条約調印。

1905年初秋、日本占領下の南サハリンを訪れ、アイ・コタン[相浜]にて妻子と面会。家族を祖国ポーランドへ連れてゆくことを申し入れるも、チュフサンマの伯父バフンケ[木村愛吉]の峻拒に遭って断念。妻や息子と決別。

1905年10月初旬、第3回の来日。神戸にてニコライ・ラッセル=スジロフスキーの事務所を手伝う。

1905年11月中旬、ウラヂヴォストクへ戻って、18日にはハバロフスクの市民集会で「労働ビューロー」設立を提案。

1905年11月末(あるいは12月17日)、ニコライ・マトヴェイエフとともにウラヂヴォストクを発ち、日本へ向かう。

1905年12月8日、サハリンのアイ・コタンにて長女[木村/大谷]キヨ誕生(→1984年1月4日、大樹町にて逝去、享年78歳)。

1906年1月初旬(あるいは1905年12月末)、マトヴェイエフとともに函館へ来航。第4回の来日(この折は7ヶ月余り日本に滞在)。

1906年1月初旬、上京。1月下旬からは銀座尾張町の「函館屋」(店主・信大蔵)2階に居を構える(→7月初旬まで)。

1906年7月初旬、長崎へ赴く(→滞在先、長崎稲佐、志賀親朋方)。

1906年7月10日、ピウスツキ論文「樺太アイヌの状態」(上) 東京にて刊行。

1906年7月30日、大北汽船株式会社の「ダコタ号」にて長崎出航。

1906年8月2日、「ダコタ号」横浜寄港。翌3日、横浜出航。

* * *

1906年8月10日、ピウスツキ論文「樺太アイヌの状態」(下) 東京にて刊行。

1906年秋、「ダコタ号」で太平洋横断後、シアトル、シカゴ、ニューヨークを経て、大西洋も横断。ロンドン、パリを経由して、ガリツィヤ(オーストリア統治下のポーランド)の古都クラクフに落ち着く。

1910年7月、ロンドン滞在。日英博覧会のために渡英した8人の沙流アイヌから、アイヌ語テキストを採録。

1912年、主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』クラクフにて刊行。

1914年8月5日、第1次世界大戦勃発。オーストリア、対露宣戦布告。

1914年12月初め、ロシア軍のガリツィヤ進駐を恐れてウィーンへ脱出。

1915年3月31日、オーストリア旅券の取得。

1915年4月～1917年11月、スイスに滞在。

1917年11月中旬、パリに到着。弟ユゼフ・ピウスツキの最大の政敵、ロマン・ドモフスキが組織した「ポーランド国民委員会」のパリ事務所に勤務。

1918年5月17日、「新橋(ポン・ヌフ)」近くのセーヌ河岸から「投身自殺(!?)」。遺体は5月21日、ミラボー橋の袂で発見される。享年51歳。

* 日本滞在関連のデータは、沢田和彦論文「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」から引用しました。

参考資料

I ピウスツキの著作

1906—ブロンラウ・ピルスドスキー(ママ)「樺太アイヌの状態」(上下、上田将訳)『世界』26号57-66頁；27号42-49頁、東京・京華日報社

1912—*Materials for the Study of Ainu Language and Folklore*. Cracow: The Imperial Academy of Sciences, “Spółka Wydawnicza Polska”.

邦訳：和田文次郎抄訳「樺太アイヌに伝わる昔話」『北方日本』15/2 100-107頁、1943；知里真志保抄訳「樺太アイヌの説話」『樺太庁博物館彙報』3/1, 1944 [『知里真志保著作集』1巻(平凡社、1977), 251-372頁に再録]；北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会全訳「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料」『創造の世界』46-84号、

1873－1992.

- 1998－*The Aborigines of Sakhalin* (A.F. Majewicz, ed., *The Collected Works of Bronisław Pilsudski* vol. 1). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- 1998－*Materials for the Study of Ainu Language and Folklore (Cracow 1912)* (A.F. Majewicz, ed., *The Collected Works of Bronisław Pilsudski* vol. 2). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- 1999－和田完訳「サハリン・アイヌの熊祭」和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭—ピウスツキの論文を中心に』3-45 頁、第一書房
- 1999－和田完訳「サハリン・アイヌのシャーマニズム」和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭—ピウスツキの論文を中心に』47-73 頁、第一書房
- 2000－荻原眞子訳「B.ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6号、219-240 頁

II ピウスツキに関する著作

- 1972－木村毅『五人の革命家』講談社（再版『日本に來た五人の革命家』恒文社、1979）
- 1973－和田春樹『ニコライ・ラッセル：国境を越えるナロードニキ』（上／下）中央公論社
- 1987－先川信一郎『ロウ管の歌—ある樺太流刑者の足跡』（道新新書）
- 1999－K. Inoue, "Dear Father!": *A Collection of B. Pilsudski's Letters to His Family, et alii* (*Pilsudskiana de Sapporo* no. 1). Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University.
- 2000－С. Тародзи, "Письма Брониславу Пилсудскому," *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* № 4, стр. 89-97. [千徳太郎治「ブロニスラフ・ピルスツキー宛書簡」『ブロニスラフ・ピルスツキー遺産研究所通報』4号、89-97 頁所収]
- 2001－荻原眞子／丹菊逸治「千徳太郎治のピウスツキー宛書簡」『千葉大学・ユーラシア言語文化論集』4号 187－226 頁所収
- 2002－佐藤忠悦『白瀬南極探検隊と2人の樺太アイヌ～探検への道程とその後の人生～』秋田活版印刷
- 2002－K. Inoue, *B. Pilsudski in the Russian Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok* (*Pilsudskiana de Sapporo* no. 2). Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University.
- 2002－ヴラヂスラフ・M・ラティシェフ、井上紘一編『樺太アイヌの民具』北海道出版企画センター
- 2002－樺太アイヌ協会編『樺太アイヌの伝統文化—ピウスツキ・コレクションより—』北海道出版企画センター
- 2002－井上紘一「ブロニスラフ・ピウスツキ」樺太アイヌ協会編『樺太アイヌの伝統文化』107-113 頁所収
- 2002－井上紘一「ブロニスラフ・ピウスツキの不本意な旅路」樺太アイヌ協会編『樺太アイヌの伝統文化』114-130 頁所収

- 2003－井上紘一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』[#] 北海道大学
スラブ研究センター
- 2003－井上紘一「B.ピウスツキと北海道：1903年のアイヌ調査を追跡する」[#] 井上編『ピ
ウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11-31頁所収
- 2003－Koichi Inoue, "B. Pilsudski's Proposals of Autonomy and Education for the Sakhalin Ainu,"
[#] 井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』49-74頁所収
- 2003－Koichi Inoue, "„Dear Father” —B. Pilsudski's Letters from the Petro-Pavlovsky Fortress,"
[#] 井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』173-88頁所収
- 2003－Koichi Inoue, "Franz Boas and An 'Unfinished' Jesup Research on Sakhalin Island,"
Contributions to Circumpolar Anthropology 4, pp. 135-163. Washington D.C.: Arctic Studies
Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
- 2003－Kazuhiko Sawada, "Bronisław Piłsudski and Futabatei Shimei," [#] 井上編『ピウスツキに
よる極東先住民研究の全体像を求めて』107-116頁所収
- 2003－沢田和彦「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」[#] 井上編『ピウスツキによる極東先
住民研究の全体像を求めて』145-172頁所収
- 2003－百瀬響「日本のアイヌ政策から見る『樺太アイヌ統治法案』—近代化政策の評価をめ
ぐって—」[#] 井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』33-47
頁所収
- 2003－田村将人「樺太アイヌ教育の黎明期（1）—千徳太郎治と山辺安之助の動きを中心に
—」*itahcara* 創刊号 47頁所収
- [#]印の付された著作はインターネットにて公開中
[URL: <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/inoue/top.htm>].

Ⅲ ピウスツキに関する TV 番組放映記録

- 1984年6月25日、NHK 特集「ユーカラ沈黙の80年～樺太アイヌろう管秘話」(山岸嵩制作)
[1987年NHK サービスセンター制作の「NHK ビデオ」カセット「樺太アイヌろう管秘
話」として市販されている]
- 1985年10月14日、NHK/ETV8「樺太アイヌ望郷の声」(山岸嵩制作)
- 1991年11月28日、NHK/日ソ・スペシャル「樺太アイヌ～失われた子守歌～」(大野兼司制
作)
- 1996年11月6日、NHK 特集「世界が見つめたアイヌ文化 第2回ロシア篇、流刑囚の遺
産」(大野兼司制作)
- 2000年12月17日、NHK 日曜スペシャル「絆は100年を越えて～家族が結ぶ日本とポー
ーランド～」(NHK・フリー映像プロダクション共同制作)